



## 本文抜

《 好きなものに出会ったら、周りが嫌い／VHSをレンタルしてアニメを観るという行為／ファンが出来ること／ノイタミナのコンセプト／ノエル・ギャラガー／／地方のリスナー／独自のアンダーグラウンド感 》

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！  
これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。  
音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、  
20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。  
今回は、アニメ東のエデンを軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

# 神聖かまってちゃんと東のエデン

閉塞感を突破する「意志」は砕けない魔物

――砕けなさの果てに

ぐずぐずいってないで、エイッと、卑怯でも後ろからでもなんでもいいから、パカッとやっちゃえばいい

(『僕ならこう考える』 青春出版社)

↓

日本を代表する思想家、吉本隆明の言葉である。

いじめられている子どもへの助言なのだが、じつをいうとこれは少年吉本の体験からきている。「パカッ」とやったのではなく、やられてしまったのだ。いじめていた子に吉本が、ある日、いきなり下駄箱で頭を思いきりひっぱたかれたというのだ。それに動転して、吉本は自分の行為を反省したという。

「音楽なんでも聴くよ」という奴のことを、わたしは信用してない。↓

「音楽なんでも聴くよ」という奴のことを、わたしは信用してない。というか、できない。ロックンロールの意志を感じないとだめなのだ。しかし、世間では「なんでも聴く」という方が寛容な心をもっているとみなされて、我々のようなJAPAN読者は器の小さい人間とされてしまう。いや、じっさいそうだとも思うけど。でも、本当に好きなものに出会ったら、周りが憎くて憎くてしょうがなくなることはあるだろうと思うのだ。

例えば、アニメがそうだった。〇〇年代中期以前はオタク＝キモチワルイ存在だった。↓

例えば、アニメがそうだった。〇〇年代中期以前はオタク＝キモチワルイ存在だった。中学生になってまでアニメを観るとするのは、ランドセルをしょって会社に出勤する成人のごとく反社会的なことだった。世間に隠れてちよくちよくVHSをレンタルしてアニメを観るという行為は、文明開化が訪れるまえの隠れキリシタンのようである。好きなんだから観るのは仕方なかった。それならば、世間はアニメより面白いものを提供してくれよ、と言いたいくらいだった。

二〇〇五年四月にフジテレビ系列で深夜アニメ枠「ノイタミナ」が出来る。↓

二〇〇五年四月にフジテレビ系列で深夜アニメ枠「ノイタミナ」が出来る。「ノイタミナ」とは「Animation」を逆読みしたもので、「アニメの常識を覆したい」「すべての人にアニメを見てもらいたい」というコンセプトだ。公式サイトには、《現実と非現実がどちらも「リアル」な今、テレビとインターネットとリアルをつなぎ、日常に少しだけ変化を与える存在でありたい。》と載っている。ノイタミナの出現は、アニメをアニメの枠だけで終わらせないという送り手側の強い「意志」を感じる。

その枠で放送されたのが『東のエデン』（二〇〇九）だ。↓

その枠で放送されたのが『東のエデン』（二〇〇九）だ。キャッチコピーは「この国の“空気”に戦いを挑んだ、ひとりの男の子と、彼を見守った女の子の、たった11日間の物語」である。

内容をざっと説明する。設定は、二〇一〇年一月に日本各地に一〇発のミサイルが落下するテロが起こる。奇跡的に1人の犠牲者も出なかったこともあり、最初あった危機意識を次第に人々は忘れていく。記憶喪失となった青年「滝沢朗」はセレソンゲームに参加していた。「一〇〇億円を使って閉塞感漂う日本を救え」ということを課せられていて、十二人のうち最初にゴールした者以外は殺されてしまう。

絵柄はアニメ的なデフォルメが効いてるものの、日本のドラマでは観ることのできないとても興味深い内容だった。閉塞感のある空気という漠然としているが確かに感じるその得体の知れないものを切り取るなんてアニメはそこまでいくのかと嬉しくなった。



セレソンゲームの参加者たちはそれぞれの方法で空気を突破しようとする。↓

セレソンゲームの参加者たちはそれぞれの方法で空気を突破しようとする。↓

セレソンゲームの参加者たちはそれぞれの方法で空気を突破しようとする。ある者はミサイル攻撃によるインパクトで、ある者は政治内部から変革を起こそうとしていた。その中の一人は映画で世界を変えようとしていた。我々、JAPAN読者にいちばん近いのはそれだろう。世の中つまらないなあーと感じている者こそこういう雑誌で自分の世界を変えようとしているのではないか。読者も革命家なのである！ノエル・ギャラガーはロッキング・オンのインタビューで、ファンがバンドをしっかりと担ぎ上げないとだめ、と言っていた。バンドが意志をもって時代の空気に戦いを挑むことはもちろんだが、ファンはそれを持ち上げることが必要ということだ。つまり、ファンも「意志」をもってバンドを応援することが大事だということだ。



『神聖かまってちゃん』はそれに自覚的だ。↓

『神聖かまってちゃん』はそれに自覚的だ。

時代の空気を変えるにはファンの熱量が必要だと分かっている。大手レコード会社やタイアップがけっして勝ち筋ではないことを〇〇年代を見てきた人間ならばリスナーとして身をもって知っているからだ。それまでの音楽業界のセオリーに乗らない形で自分たちが吐出すためにどうするか考えると、ファンと密にやりとりをすることになるだろう。彼らはインターネットを駆使して、既存のメディアやレコード会社を通さず自分たちの姿を晒していった。

〇〇年代後半、↓

〇〇年代後半、メジャーとインディーの差がなくなって、ライブ以外でアンダーグラウンドシーンを体感できないでいた。地方のリスナーはとくに困った。しかし、『神聖かまってちゃん』はネット空間を居場所にして、独自のアンダーグラウンド感を生み出した。

の子が「インターネットポップロッカー」と自分のことを評するように、↓

の子が「インターネットポップロッカー」と自分のことを評するように、楽曲はポップで神々しい。歌詞は内向的で自傷的である。その音楽性によって多くのロックリスナーを生んだ。当時、ポップでキャッチーを全面に出す新しいバンドはいなかったし（カッコつけたバンドは多くいた）、内向的で自傷的な歌詞のバンドもいなかった。

パンクでやってきた彼らはロックリスナーでない少年少女を持っていった。ロックの文脈が不要なく聴けるロックンロールが圧倒的に足りないこの時代に「ロックンロールは鳴り止まない」は間違いなくアンセムになった。



↓

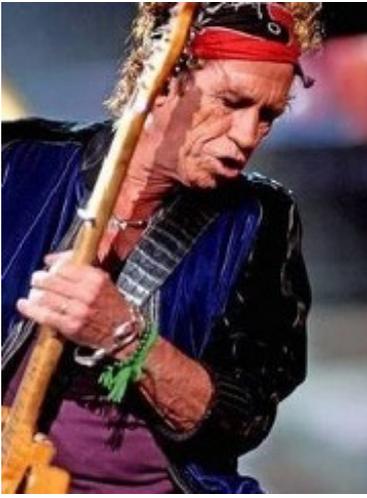
でも空気を塗りかえるというまでには至っていない気がする。

一〇年後に一番評価されるバンドになるのは分かっているが、いまのロックシーンの停滞した空気をブチ抜いてないのがもどかしい。風穴は開けた。あとは何を待てばいいんだろう。ファンが出来ることっていったいなんなんだろう。



ローリングストーンズのキース・リチャーズは↓

ローリングストーンズのキース・リチャーズは、おれたちは先人からロックを渡されたみたいに次の世代にロックを伝え渡していくことくらいしか出来ない、ということを行っている。社会を変えるとかかかげてもミュージシャンは実際それくらいしか出来ないということだ。しかし、ローリングストーンズのキースでさえそれくらいしか出来ないのかと知るとなんだか、勇気が出る。↓



『神聖かまってちゃん』という本当に好きなバンドに出会ったリスナーは周りが憎くて憎くてしょうがなくはないと思う。ロックンロールを受け取った証拠だ。そのリスナーが、かまってちゃんを好きになったことは間違っていないんだ、と世の中に何らかの形で伝えていくことをするのだ。←

うおお

## 神聖かまってちゃん

<http://p.booklog.jp/book/84143>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ